

令和元年6月21日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K03082

研究課題名(和文) ミャンマーのカレンを事例とした民族生成と民族問題化の過程に関する歴史研究

研究課題名(英文) A Historical Study on the Formation of Karen Ethnicity and Its Ethnic Problem in Myanmar

研究代表者

池田 一人 (IKEDA, KAZUTO)

大阪大学・言語文化研究科(言語社会専攻、日本語・日本文化専攻)・准教授

研究者番号：40708202

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：多民族/他宗教社会ミャンマーの存立基盤を問う民族問題についてカレンを事例とし、第一に民族生成と民族問題化の過程解明、第二に民族生成と民族問題化における宗教機制的関わりの解明を研究目的とした。第一の点については、カレン民族問題が実はビルマ民族主義運動との間で発生し膠着化した問題であり、英植民地政府の政策にその原因を帰するのはビルマ民族主義運動の言説操作があったことを実証した。第二の点については、仏教徒ポーカレンの東ポー文字の普及・使用過程とヤンゴンのスゴーカレン僧院の設立過程を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の特色は、ミャンマーにおける民族とその政治問題化の機軸を明らかにしたことにある。学術的には第一に、ミャンマーの代表的民族問題であるカレン問題の起源と史的構造に関して通説の明確な否定と説得的な歴史過程が提示された。第二に、ミャンマー史における民族という単位の歴史性が指摘され、したがって民族を当然の単位としたミャンマー通史叙述への批判という結果も期待できる。通説に対する批判がほぼ皆無の現況からして、本研究は他に類例のない革新的な研究であると自負したいが、社会的・国際的な認知を得るまでは地道な唱道活動が必要となろう。

研究成果の概要(英文)：Ethnic issue of Karen people has been a serious challenge for Myanmar nation-state which has been suffered ethnic and religious conflict since its independence in 1948. This study focuses on the process of ethnic formation and politics of ethnicity on Karen, and its religious connotation. It is pointed out that the Karen ethnic problem in Myanmar was created not by the divide and rule policy of the colonial British government but originated from its relation to Burman nationalist movement. The Burman nationalists' discourse to attribute its responsibility to the British has been an attempt to distract their failure to manage ethnic relations after the Myanmar independence ending up serious and enduring ethnic conflicts to this date. As to the religious aspect of the Karen ethnic formation, cultural movements on Buddhist Pwo Karen scripts and the establishment of a Sgaw Karen monastery in Yangon were studied in this project.

研究分野：ビルマ史、ビルマ地域研究

キーワード：ミャンマー ビルマ カレン 民族問題 民族 歴史観

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 民族問題は多民族 / 多宗教国家・社会ミャンマーの存立基盤を問う根本的な問題である。1947年憲法において設計された連邦制という多民族 / 多宗教共存の枠組みは、ビルマ民族中心主義の軍政のもとに形骸化して現在に至っている。これに対応するように民族問題化の史的過程についての一般理解は旧態依然としており、民族問題の起源は英国植民地時代の「分割統治政策」にあり、さらにビルマ族と民族的少数派のカレンやシャン、モン等との間には王朝時代を通して長く競合や敵対関係があったという理解が通説化している。

(2) 従来のミャンマー研究は、その民族問題理解の視座がすでにビルマ民族中心主義的であることを十分相対化できず、加えてミャンマーにおける「民族」とは古代史からの無謬の歴史的主体、もしくは植民地期に西欧近代が与えた輸入物であるという雑駁な理解しか示し得ていない。ミャンマーの民族生成過程の歴史研究は19世紀以降を含めた全体像を示し得ず、ましてや「民族」という現象が民族問題化に至る過程と歴史的接合面を、広い視野から検討する視角に欠ける。

(3) 研究代表者はこれまで、19世紀から20世紀半ばに至るカレン民族意識と民族運動の形成過程の事例検討を通して、今般の研究目標設定につながる実証的な歴史研究を積み重ねてきた。そして、カレン民族問題が英国植民地統治下で発生したものではなくおもに独立ミャンマーの主体となったタキンとその後継者の民族政策の瑕疵に起因したものであること、キリスト教徒カレンの民族形成については、植民地化されつつも仏教王朝が並存する19世紀のミャンマー世界では例外的に早期の出来事であり、カレン民族形成における宗教活動の重要性を指摘した。

2. 研究の目的

(1) 以上の蓄積に立脚しカレンにおける民族生成と民族問題化の過程を論ずるとなると、ミャンマー南東部パアン地方のカレンが事例研究の素材として適切である。パアン地方に関連する「カレン」の研究は多く、18世紀以降の仏教ポー・カレン文字貝葉文書生産、10以上のカレン系文字とその共同体形成史、王朝下の諸カレン叙述、19世紀以降の米バプティスト布教史、カレン系カルト諸宗教運動研究、人類学者の民族誌、20世紀の政治と武装闘争史などがある。

(2) これらの先行研究を土台に、第1に、既存の先行研究とそれらが依拠する一次史料を本研究の視座と光源のもと再検討し、18世紀後半から20世紀半ばにいたる期間を対象にカレンの民族生成と民族問題化の史的過程を素描することが本研究の目的となった。

(3) 第2の研究目的は、レーケー(1860年創始)、テラコン(同時期)、プーパイッサン(1866年)など「カレンの」宗教カルト運動の展開を中心に、同時期に活性化したバプティスト宣教と仏教徒の動向との相互関係を明らかにし、そこでいかに「カレン」が語られ交流し構築されたか(あるいはされなかったのか)その機制を解明することとした。これに加えてパアン地方の仏教徒の政治・文化運動の実態の把握につとめた。

3. 研究の方法

(1) 歴史研究であるため、現地での史資料収集・聞き取り調査、データ分析、報告・討論とフィードバック、論文執筆・投稿という流れが研究方法の基本となる。想定される関係史料の入手先は、現地ミャンマー・ヤンゴン市の国立公文書局(NAD)と国軍歴史資料研究所(DSHRI)、ヤンゴン大学中央図書館(UCL)と歴史研究局(HRC)、国立図書館(NL)、カレン州とデルタ地方など下ミャンマー各地の現地、英国では大英図書館のインド省植民地行政文書(BL-IOR)と国立公文書館(TNA)、ケンブリッジ大学やロンドン大東洋アフリカ研究院(SOAS)、米国では米国バプティスト歴史協会(ABHS)などを、当初の調査場所として想定した。今プロジェクトでは、英国大英図書館の植民地行政文書の精査を中心とした。

(2) 第2にデータ分析、報告・討論について。第1課題のデータ分析については、史料の語り手と「カレン」の関係性について一貫性のある視角から先行研究とその一次史料の扱いについて再検討を行った。第2課題については、英植民地政府、米バプティスト宣教師の視線から捉えた「カレン」カルト運動の記録、そのカルト団体の後継者である「カレン」らが20世紀に入ってから残した記録など、記述の位相を考慮しながら分析を進めることを目標とした。加えて、仏教徒カレンの僧院内外での政治・文化活動(とくに仏教徒ポーカレン文字の普及運動、スゴーカレン僧院の設立経緯)の実相の把握と記述を行なった。

4. 研究成果

(1) 第一の課題

第1の課題は、18世紀後半から20世紀半ばにいたる期間でカレンの民族形成と民族問題化の史的過程の素描であるが、これについては20世紀前半部分について先行して論文化し、その概略を示した(「ミャンマーにおけるカレン民族問題の起源とタキン史観に関する覚書き」)。前半部分については近い将来の論文化を目指して取り組んでいる。

英領植民地下のカレン

カレンをめぐる民族状況が「民族問題」とされるような状況にステップアップした主たる要因は、ビルマ民族運動との関係性に求められる。従来言われてきたように、英植民地政府によるカレン民族優遇説は妥当しない。というのも、この説はカレン全体が親英的であるという前提に立っているが、親英的なカレンはその15%ほどのキリスト教徒にすぎず、8割を占める仏教徒は植民地期、いまだカレン意識に希薄であった。

ビルマ民族運動とカレン

カレンが民族問題化した契機は、1920年代から40年代にかけて反英独立闘争において急進化したビルマ民族主義がカレン全体を「親英民族」と単純化し、親英か否かを民族毎に区切って政治キャンペーンに利用したことが大きな要因である。植民地期を通して言説上には存在していなかったカレン＝ビルマ民族対立が、日本占領期冒頭の混乱の中で実体化する。

日本占領下のミャウンミャ事件

ミャンマー史上におけるミャウンミャ事件を含めたカレン＝ビルマ紛争の意義はおおきくは3点にまとめられる。第一に、「カレン」におおかた無縁であった仏教徒カレン語話者が、宗教の垣根を超えた「カレン民族」としての初めての経験を、対ビルマ民族において経験した。第二に、このようなプロセスに決定的な役割をはたしたのがビルマ民族主義者、わけでもタキン党員であった。第三に、この紛争は土着民族間のはじめての民族衝突であり、戦後のミャンマー全体に及ぶ膠着化・長期化する民族問題の出発点であった。

独立交渉期におけるカレン政治

ミャンマー独立にあたって最大の政治問題はカレンであった。それは、植民地期に別個に統治されていた「管区ビルマ」(英直接統治地域)と「辺境地域」(同間接統治地域)を統合することが、当時の最大の課題であると当時の諸政治主体共通の認識であり、両地域にまたがって居住し政治活動を繰り広げていた「カレン」が政治の要を構成していたからである。タキンは諸カレン政治勢力の分断を図り、そして成功した。これによって不満を抱えた主流派を含むカレン諸派が戦後の武装闘争に踏み切ることになった。

ミャンマー民族問題の性格

カレン民族意識の生成過程とその民族問題化過程の検討からは、ミャンマー民族問題の基本的性格として2点が指定できる。第一に、ミャンマーにおける民族問題という現在の状況は、植民地期の分割統治政策の悪弊が独立後70年にわたって作用し続けているというより、独立後のビルマ民族中央政府と各民族団体の間に継続的に起きている問題である。第二に、独立後に激しくなる民族問題の起点としての諸民族団体・政治組織の武装蜂起は、タキン/ビルマ族に近いものから順に行われていった。

(2) 第二の課題

第2の課題は、カレン系宗教カルト諸運動と仏教徒カレンの政治・文化活動の実相把握であるが、とくに仏教徒カレンの活動についてパアン平野のポーカレン文字普及運動とヤンゴンのスゴカレン僧院の設立経緯の解明について取り組んだ。本課題のうち、パアン地方のカレン系の諸宗教カルト運動については基礎情報の収集を行なって、さらなる史資料収集と分析は今後の課題として残されている。

パアン平野の東ポーカレン文字とその歴史的意義

パアン平野の東ポーカレンの仏教は、ポーカレン仏教文字の創始者ブータマイット、そのポー文字による経典生産活動を担ったポー僧院の存在が核となって語られる。ポーンミンによる75包のポーカレン貝葉文書研究があり、ウォーマックはこれをもとにポーカレン僧団の系譜を論じている。だが、研究代表者の調査により「仏教ポーカレン文字」が19世紀の半ば以来、おもに僧院で僧侶が経典を編纂するために使われた経典文字であり、この地域のポーカレンの民族主義運動や民族意識のたかまりによって普及活動が続けられているものの、生活文字として存立したことはいまだかつてないということが判明した。カレンの文字共同体の議論について欠落した論点が見えてきており、この点を含めた論文化を今後試みる。

ヤンゴンにおける「カレン教学院」の寺院縁起

現在、ヤンゴンにはカレンを名乗る民族僧院が20あまり存在する。とくにミャンマー随一のシェエダゴン・パゴダの南麓にはヤンゴンで最古の1936年に創建されたスゴカレン僧院である「カイン・パリヤッティ・チャウンタイツ(カレン教学院)」とそれに隣接する「カイン・サーチーチダクタイツ(カレン三蔵経庫院)」がある。1930年代のはやきに、仏教徒のスゴカレンがとくに「カレン」を名乗って宗教活動に勤しむ事例はほかになく、この寺院の創建過程は仏教徒スゴカレンのあいだにおけるカレン意識の生成を考える上で貴重な題材となる。聞き取り調査と文献調査を通して、カレン仏教の中心地と目されたミャンマー南東部パアン地方と関係のうえではなく、カレン仏教の僻地ともいえる西部デルタ地方のスゴカレン人素封家が、こ

のヤンゴンのスゴーカレン僧院設立に深く関わっていることが判明した。デルタ地方はキリスト教徒カレンの濃厚な宗教活動が19世紀より行われた地域であり、今後はこの動向と合わせてキリスト教徒と仏教徒カレンの関わりを調査する必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

- (1) 池田 一人「ミャンマーにおけるカレン民族問題の起源とタキン史観に関する覚書き」Ex Oriente (大阪大学言語社会学会) Vol.24 pp.27-61. 2017年3月「査読無し」

〔学会発表〕(計5件)

- (1) 池田 一人「ロヒンギャ問題の歴史的背景と現状」大阪大学地域研究フォーラム第70回例会(2018年11月15日、於・大阪大学箕面キャンパス)
- (2) 池田 一人「ロヒンギャ問題の現状についての報告」国際情勢研究所東南アジア研究会(招待講演、2018年7月5日、於・国際情勢研究所)
- (3) 池田 一人「Karens and the Thakin Historiography」京都大学東南アジア地域研究研究所第32回ゾミア研究会(2018年1月6日、於・津田塾大学千駄ヶ谷キャンパス)
- (4) 池田 一人「19世紀パアン平野のカレン史 『仏教徒カレン』をめぐって」京都大学 CIAS 共同研究プロジェクト「少数民族の多様なやりとりにみる現在のゾミア地域」研究会(2016年12月10日、於・龍谷大学)
- (5) 池田 一人「仏教ポー・カレン文字の成立過程とプータマイツ伝説の再検討」東南アジア学会第95回研究大会パネル「宗教実践における声と文字 東南アジア足り区部から考える」(2016年6月5日、於・大阪大学豊中キャンパス)